

マナーを学ぶ学校の中のワイルドな少年たち

Niels Kryger

現在のしつけや教育の理論に関する議論では、ジェンダーが注目されている。これまでの多くの論争の根底にあった理論は、問題をかかえているのは少女たちであって少年たちではないというものであった。その一方で、しばしば少年は、少女たちに問題を起こさせる原因であると認識されてきた。

したがって、このような少年や男性に対するジェンダー問題の観点—平等実現のための闘争であるという考え方は、次のような論理的帰結を導くに違いない。それは、少年や大人の男性は、女性たちに活動の場を譲り、しばらくの間裏方にまわるべきだということである。

しかし、この機械的で固定的な平等に対する見解は、現実の子どもたちや若者、特にまだ男らしさを身につけていない時期についてはほとんど役に立たないだろう。

マナーを学ぶ学校の中のワイルドな少年たち

現在の学校は、少年の外向的な身体表現や、彼らの限界への挑戦という行動の中に、あえて積極的な意味を見いだすことによって、むしろ多くのことを知るべきであると私は確信している。具体的な教育場面において、彼らの限界への挑戦は、しばしば規律的な行動を乱すものとして問題になる。なぜなら、学校はいまだにマナー、勤勉、穏健な行動を基礎としているからである。

学校において身体は、精神的・言語的な「真の」活動をするときに、しかたなく魂が宿らねばならない邪魔な付属物として見なされている。多くの少女たちは「マナーの学習」にうまく順応するが、少年たちの多くは順応することが難しいと感じる。

実際、少年の中には、「マナーの学習」を拒否することでうまく対処しようとするものがある。彼らは、元気がありあまっているので、また家庭からも離れているので、限界へ挑戦し、特別な強さと知識を身につけるのである。しかし、うまく対処できない少年もいる。彼らは学校との衝突が避けられないところにいる。

したがって、学校における少年の問題について議論する場合、次の点を想定することが重要である。

－問題は、少年がもつある(不幸な?)特性ではまったくなく、学校の文化とその学習 についての理解である。

－少年たちはただの少年たちではない。彼らには大きな違いがあり、社会的な差異もある。

本物の男になること－あらゆることをものともせず－

少年たちにはそれぞれの違いがあるにも関わらず、彼らはすべて一様なプロジェクトに束縛されている。それは、「自分」を少年であり、未熟な男性であると認識させるものである。

ジェンダーについて議論されているにもかかわらず、また雇用市場における変化にもかかわらず、男性・女性としての、また少年・少女としての自分自身の経験と結びついたアイデンティティは自己理解の重要な部分をなしている。

しかし、これまでのジェンダーと平等に関する論争のほとんどの論理は、伝統的な性役割を打破しなければならないというものであった。

多くの善意ある教師たちや子どもの成長に関わってきた人々は、少年たちに新しく他のやり方で男になるべきであるということを悟らせようとしている。同時に、少年たちはわれわれの社会の中で男になるということが、いったい何を意味するのか、その答えを見つげだそうと必死である。

少女の空間と少年の空間

いくつかの研究が以下のことを示している。それは、自由時間でも学校の中でも、子どもたちは「女の子の空間」と「男の子の空間」を作り上げることに熱心だということだ。その空間の中でかれらは、同性の友だちとの友情を深めている。この同性の友だちと友情を深める機会をもつということは、少女にとっても少年にとっても、ジェンダー・アイデンティティを確立していくためには重要である。

ジェンダー・アイデンティティの重要な部分は、異性とは違うという実感である。

思春期の初期に、自分の属するジェンダーの「役割」を、非常にステレオタイプ的な方法で内面化し、行動化するということは、多くの若者にとってほとんど習慣になっているように思う。(このロールプレイの特定の形式は、社会的・文化的な価値にきわめて従属したものである。)

重要なことは、平等についての議論においてはしばしば忘れられがちであるが、少年と少女にとって、幼児期と青年期を通じて明確なジェンダー・アイデンティティを確立すること、少年にとっては少年としての、男としての夢を「行動化する」ことが大切だということ

とである。その結果彼らは、自分自身のジェンダーとの建設的な関係を育てていくのである。しかし、多くの教師が、この(男らしさの)「行動化」を不穏な要素と見なすために、その「行動化」は困難になっている。

多くの少年たちにとって、伝統的な学校経営のあり方が、彼らのジェンダー・アイデンティティを確立するためにはあまりよい環境ではないことに、私は危惧を抱いている。それは、現実にあるステレオタイプの極端な男性イメージがほとんど排除されているからである。しかし現実には、そのようなステレオタイプの男性イメージとも折り合いをつけて、少年たちは自分のジェンダー・アイデンティティを確立していくのである。

(渋谷美穂)